

【追悼 阿部重一郎さん：さすがの“漁師の技”】

<2016. 1. 17 記>

『鳴り砂 No.259』の阿部美紀子さんの『今、女川では』で、阿部重一郎さんが昨年12月末にお亡くなりになられたことを知りました。<以下は記憶頼りですので、不正確でもお許し下さい。>

重一郎さんは女川・出島（いずしま）の南の集落「寺間」の漁師で、港から細い道を登った、確か縁側から女川原発が南側正面に見えるお宅にお住まいでした。直接理由をお聞きしたことはありませんが、『原発反対』の筋が通った方でした。

1983年10月の1号機試運転を契機に、女川原発による放射能汚染を調査するため、継続的に松葉と海底土を採取・測定することになり、開始前の1回は急遽浜辺付近の水深数メートルの砂質土を採取しましたが、海の深部の海底土が望ましいということになり、女川現地（反対同盟）に相談した結果、重一郎さんに船を出していただくことになりました。そして、1984年から10年前後、春・秋の年2回、養殖や海釣り客などの本業を休みにして、無償でご協力いただきました。

朝、女川港（や阿部麟）まで迎えに来ていただき、まず女川原発西側（ウラ）の五部浦湾の中央部、次は原発の放出口前、最後に出島との間にある出島水道の狭隘部（出島架橋の予定地）の3箇所を回っていただきました。初回は、こちらで船から見える集落と地図を見比べながら「もう少し前。もう少し左。」とかゴチャゴチャと“注文”しましたが、（当時まだ“若造”だった自分の指示に）嫌な顔ひとつせずとその都度船を細かく移動させて下さり、次回以降はこちらから何か言う前にピタリと採取地点に船を停めて下さいました。

また、風や潮流・海底の状況（砂質か土質か）などの関係で、特に原発前では採泥器（ロープに沿って錘を落とし、錘の衝撃で採取口を閉じ、海底土をつかみ取る仕組み）による採取が難しく、何度も“空振り（採泥器を引き揚げたら採取口が開いたまま！）”がありましたが、重一郎さんは、多少高くてハスキーな声で「チョットそのまま待ってらいね。」と言って船を前後に細かく動かし、船上から海底へ延びたロープが真っ直ぐになるよう（錘が真っ直ぐ勢いよく落下し、採取口を確実に閉じるよう）微調整して下さいました。さすがその道何十年の“漁師の技”でした。

さらに、短時間（午前中一杯）で採取作業が終わるよう配慮していただき、採取地点間の移動は“波を読んでの高速走行”でした。水の苦手な自分にとっては、波が高かったり霧が出ていた時はかなりの恐怖感でしたが、重一郎さんは笑顔で「いつもよりゆっくりだから大丈夫！」と言って、私たちを女川港に送り届けてお一人で出島へ戻られる時は、本当に倍くらいのスピードで颯爽と帰って行かれるのでした。

<篠原さん・ヨッコさん・日就寮反原発研のメンバーを勝手に代表して>